

35. 原因不明の肝肉芽腫の1例

前田日利, 仲野敏彦, 高田信一
 小山秀彦, 長門義宣, 高橋 淳
 野口武英, 伊藤文憲, 大野孝則
 (船橋中央)
 武藤高明 (同・外科)
 近藤福男 (千大・二病)

症例は56才男性。C型慢性肝炎の経過観察中、腹部超音波検査で肝S6に約2cmの腫瘍性病変2個を認め入院。Rapid CT、腹部血管造影施行するも血流に乏しく肝細胞癌としては非定型的な所見、またS状結腸癌が認められたため肝転移と診断し手術施行。大腸病変は腺癌で、肝の腫瘍病変は肉芽腫と肝細胞癌であった。肉芽腫については種々の原因検索するも本症例の原因は不明だった。

36. 塩酸ミノサイクリン注入にて治療した巨大肝嚢胞の1例

服部祐爾, 遠藤哲也, 平井 太
 齋藤正明, 佐藤重明
 (鹿島労災)

肝嚢胞は健常人にも高率に認められるが、臨床症状に乏しく良性疾患であるため通常治療の対象となることはほとんどない。しかし圧迫による症状を有するものや破裂、出血、悪性化またはその危険性のあるものに対しては何らかの治療法が必要とされる。

今回我々は上腹部に圧迫症状を有する巨大肝嚢胞に対し塩酸ミノサイクリン注入療法を行い、有効な経過を得ている症例を経験したので報告する。

37. 左肝内門脈-肝静脈短絡の3例

遠藤哲也, 平井 太, 服部祐爾
 齋藤正明, 佐藤重明
 (鹿島労災)

門脈-肝静脈短絡は従来より、比較的稀な疾患と言われていたが、近年の画像診断の進歩により発見の頻度が増加してきた。原因としては胎生期の卵黄静脈、静脈管の遺残、動静脈奇形によるとする先天性の説、門脈圧亢進症や炎症後、外傷などによるとする後天性の説がある。治療については無症候例については経過観察、有症状例については経皮的門脈塞栓術、外科的門脈結紮術、肝部分切除等行なった例が報告されている。

38. 留置スネア、ミニループと透明キャップを使用した静脈瘤結紮術

佐藤慎一, 木下由彦, 土田弘基
 (国立佐倉)
 蜂巢 忠 (同・外科)

今回我々は、留置スネア、ミニループと透明キャップを使用した内視鏡的静脈瘤結紮術(EVLSC)を開発した。10例の食道静脈瘤症例にEVLSCを行い、全例でFナンバーの改善と90%にRCサインの消失を認めた。本手技の利点は、オーバーチューブを使用せずに短時間に複数の静脈瘤結紮が可能な事、透明キャップを使用しているため術中の視野が良好な事である。手技が簡便で治療効果が確実な本法は、極めて有意義な手技と考えられた。

39. 小胆石による胆石発作時のCTの有用性について

関谷武司, 鈴木泰俊, 水本英明
 菊池保治, 深町唯博
 (船橋医療センター)

発作時の胆管胆石のUSをCTの描出率について比較検討を行った。USは42.1%(8/19)、CTは84.2%(16/19)であった。CTはUSで診断困難な胆管末端部や十二指腸乳頭部に嵌頓した症例での胆管胆石の診断に有用であった。

40. 自験例におけるMR cholangiogramとPTCの比較検討

伊藤健治, 藍 寿司, 畦元亮作
 (県立鶴舞)
 柚木宏和 (泉台クリニック)
 中野陽子, 鶴澤真宏, 相楽恒俊
 (市原市民)
 露口利夫 (千大)

今回我々は、MRCとPTCの比較を行い得た2症例について検討を行った。症例1は頸部胆嚢癌で、総胆管上部に浸潤狭窄をきたしていた。症例2は総胆管および左肝内胆管2次分枝に胆石を認めた。以上を検討した結果、MRCの描出能は総胆管および1次分枝では良好だが、2次分枝以下の描出は困難であった。しかし、非侵襲的に直接造影に類した像が得られる利点は大きく、今後診断能の向上を期待したいと思います。